釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　6

同期の桜と噴馬天狗

鹿島釣行

同期の桜

六月四日（水）の平日に、予め休暇を取っていた。この時期に大椴海岸の真ガレイが絶好調になるだろうと踏んで、前月のうちにシフトを組んでいたのだ。しかし例年にない冷たい海水温のためか、釣り新聞からの情報は何も出ていない。丁度息子の休日と重なったので誘うと、「仕方がないので運転してやるか」と宣う。女房は飛騨高山、黒部ダムの観光に女仲間八人連れで旅立っていた。

明け方、大椴について早速竿を出す。息子はＰＥ０．８号を巻いたＥＸの軟竿二本、私はナイロン二号を巻いたＣＸを三本出す。アタリがないまま時が過ぎていくが、息子にピクピクとアタリが出て上げてみると川ガレイが付いていた。息子は今日の目標の一枚は釣れたと、ぽかぽか陽気に誘われてのんびりと砂浜に横たわってうたた寝をしてしまった。

息子が最初にチビカレイを釣った

付近の釣り人に状況を聞きに行った。「おはようございます。どうですか」と声を掛ける

と見覚えのある顔である。「おっ！」とお互いに顔を見合わせた。学生時代、同じゼミナールで釜の飯を食った同期生である。当時はまだまだ乗用車などを持っている学生は少なかったのだが、彼はコロナを乗り回して渓流や磯に出かけていたのである。学内サークルの「渓流会」にも私と一緒に所属していた。こんなところでぱったりと出会うなど全くの奇遇だ。世の中本当に狭いものである。

彼は、退職後、パチンコに熱中していたのだが最近は負けが込むようになって、きっぱりと足を洗ったそうである。その代わり若いときに親しんでいた釣りに鞍替えしたのだそうだ。週二回は出掛けているという。三日前の六月一日の解禁日に、学生時代に通い慣れた音威子府の渓流に行ってみたが、様変わりしていてヤマメ六匹の貧果で引き上げてきた。二日前もここ大椴に来たが底荒れがひどくて川ガレイ四枚しか釣れなかった。昨日はウトナイ湖に注ぐ美々川に入って行ったが工事中の為に鉄柵でガードされており、むなしく引き返してきた。今日は凪のカレイ日和なので二日前のリベンジのつもりで来たという。それでは毎日どこかに釣りに行っていたことになる。先週は佐呂間湖のクロガシラ釣りを堪能したので、明日からは羅臼に行こうと考えているというのだ。サンデー毎日の良い身分である。卒業後のことなどをしばらく談笑しながら時を過ごした。

自陣に戻ってもアタリがさっぱり出ないので、ルアー竿を取り出し、同期の桜にあやかって桜マスでもこないかとジグミノーを飛ばした。その三投目でコツンとアタリが出てそのままただ巻きしているとグックと食い込んで、魚が疾走する。その走りっぷりからサクラマスではないかと期待したが上がってきたのは体高のあるアメマスだった。身長を測ると６２．９㎝もある立派な物だった。しかし、その後は何度もルアーを取っ替え引っ替えしたがサクラからの便りは同期の桜（サクラ）で終わってしまった。

サクラかと期待したが

ルアー竿を置いて投げ竿の方に戻るとガクンと竿尻があがった。大物だ。クロガシラなら糸ふけが出るだろうと待っていたが、竿はそのまま止まってしまった。合わせを入れてリールを巻くとなにやら重たい。刺さり混むような引き込みも出ないで砂浜にあがったのは思いもしないカジカだった。この大椴海岸はどこまでも続く砂浜である。アタリが出ないので仕掛けをサビいていたら７０ｍ程の所で根掛かりがあって、テーパーラインを失っていたのだ。その根に居着いたカジカだったのだろう。同期の桜に、カジカをもらってくれるかと尋ねたが、食べないというので自宅に持ち帰ることになった。陽が高いところに昇ってしまったのでそのカジカと川ガレイ五枚、太平洋のエサにするアカハラ二本を持ち帰った。

このカジカ食べますか？

同期の桜に会った次の週の釣り新聞を眺めていると、一面の写真で竿先を見つめる釣り人の姿が彼の姿と酷似しており、二面を開くと得意満面の顔つきで、釣り上げた真ガレイを持った彼の写真が取材記事と共に大きく掲載されていた。「羅臼町松法漁港でカレイ、コマイ三桁釣り」という記事である。やるなぁ。うらやましいなぁ、毎日のように釣りに行けるなんて。

そしてその次の週の六月二十二日、二十三日にはゼミの同期会「野郎会」が計画されていた。北斗市に住む仲間から函館市内で開催するとの案内をもらっていたのだ。大椴で会った彼もその同期会に行く予定なので、車に同乗させてもらうことを約束していた。野郎ばかり十名の会が、近年他界した者もいて八名となり、五年に一度から二年に一度、そして毎年やろうということになったのだ。その同期会に彼が載った新聞を持って行って皆に見てもらった。そして、世の中の奇遇とその奇遇の中で出会った仲間の会を大切にしていこうという話で盛り上がった。

私たちが学生の頃は、私も含めて多くの学生が左翼思想に凝り固まっていた。中央では東大安田講堂が急進派の学生に占拠された。私が学んだ田舎都市もその余波を受け、ヘルメットをかぶりゲバ棒をもった先鋭的な学生たちが「反米、反スタ」「日帝打倒」などと気勢を上げてバリケードを築き校舎を封鎖してしまった。封鎖された二年生の時は休校が続き、ほとんど学校に行っていない。しかし、焼酎の梅割りなどを飲んだ時にみんなで唄う歌は、なぜだか「インターナショナル」ではなく、軍歌「同期の桜」だった。そして、時

代が変わって、剥げ親父どもが函館の一杯飲み屋で肩を組んで唄った歌も昔と同じだった。

頓馬天狗

六月十五日、「とんとん会」との合同大会が岩見沢釣遊会主催で笛舞港〜東洋港で開催された。二つの会が釣りを通して楽しく交流が出来ればと準備を整えている最中に、当初予定していたバス会社が、消費税率の引き上げ、ガソリン代の高騰などを理由に大幅な値上げを申し入れてきた。大元は、国土交通省による安全コストを反映した運賃制度の改正に端を発したものらしい。国交省が運賃制度改正を打ち出した背景は、二〇一二年四月に群馬県の関越自動車道で発生した高速ツアーバスの事故にある。この事故は運転手の居眠りが原因とされ、一カ月の上限を超えた長距離運転などの労働環境が問題視された。

その値上げ要請に応えることが出来ずにバスの手配がつかなくなった。一時は大会の延期や中止も覚悟していたが、様々なバス会社に電話を入れて、なんとか予算との折り合いが付いて予定通り開催することが出来ることになり、ほっと胸を撫で下ろした。今までは大会参加費を五千円で運営してきたが、今後は一万円にしなくてはバスを借りることもできず、会の存続自体が危うくなることが予想される。随分と無理を言ってお願いしたバスの中では、私が進行を務めたが、今回の経緯を含めていつもより念入りに大会規定や審査方法を確認した。今後の運営に一抹の不安を抱えながらも、皆、大海原に思いを馳せながら和やかに交流を深めることが出来たと思っている。

私は、東歌別に入った。今年のように海水温が低い状況で推移している時期は、東歌別のような浅い海が狙い目だと踏んでのことだ。二週間前の竿道会大会ではたった四本の釣果しかなかったのだが、どれも大物だった。一週前に開かれた道釣連の支部予選大会ではやはりこの界隈で大物が揃ったらしい。しかし、考えることは誰も同じで、私が着いた時の舟揚場はどこも満杯状態で、結局、防潮堤の上から打つことになった。

自分の思いに反して、アタリは出ない。風もなく、海の雰囲気も良いのだが、数日前から続いた時化の為に防潮堤付近にゴミが寄り付き、流れ昆布とホンダワラが仕掛けに纏わりついてくるのだ。付近の舟揚場に入った釣り人に聞いても誰も笑顔を返してはくれない。唯一、左の方の舟揚場でカジカとタカノハを釣り上げた御仁がいた。私がここに着く前に上げたものらしいのだが、それ以降は全くアタリが無くなったということだ。私も既定の魚は揃ったがチビカジカとハゴトコのみである。

それにしても流れ藻が多い。防潮堤の上にようやく引き上げた流れ藻の中から、昆布を選り分けて背後の昆布干し場に並べておいた。低温の為に実入りが少ないように思うが長さは十分なので綺麗なものだけを選んでから並べたのだ。それでも十数本にもなってしまった。この昆布干し場の持ち主は果たして使ってくれるのだろうか。昆布拾いが始まっている時期だから何かの役には立つだろう。

防潮堤の際をあちこち移動しながらも、ようやく前の岩に乗ることが出来る潮加減になった。締め切り時間まで正味一時間半である。いつものアブラコ場に次々と遠投を掛ける

も、ハゴトコのみで大物のアタリは出ない。近投に居るはずのカジカも出ない。打つ方向を変えていつもは届かない沖の昆布根に向かって一本バリで遠投した。その昆布根の向こう側に仕掛けが入った。歳を重ねるごとに腕力は無くなってきたが、遠投力は少しずつ付いてきたように思う。それに、大きなアタリが出て竿を煽ると魚が乗った。昆布根に刺さりこまれないように渾身の力を込めてリールを巻いた。しかし、歳を重ねるごとに持久力も無くなってきて、リールを巻く力が徐々に弱弱しくなりやっぱり途中の昆布根に潜り込まれてしまった。ボロ竿を両手で持ちグイッ、グイッと煽る。抜けた。そして目の前の昆布根からゴボッと魚が浮いた。丸々と太った５０㎝程のアブラコだった。竿上げまで残り十五分、竿三本ともそこに集中して振り込んだがアタリは出なかった。

入賞者の顔ぶれ

頓馬天狗

大会審査結果を、高橋治氏の著書「波太郎放浪記」風に文書を認(したた)めてみた・・・

「とんとん会」と聞いて何を連想するかって。それはとんとん拍子に事を進める頓馬（大村崑主役の「頓馬天狗」なんて番組のことなんて知らないだろうな）な豚の集まりだろなんて言っているお前さん、見当違いも甚だしいんだよ。前回の第二回大会を思い出してみてよ。完膚なきまでに叩きのめされたのをご存知だろう。今回はその惨敗を引きずらないように奮闘してほしいもんだ。天候の方はというと大荒れの予想から一転し、風も波も治まって雨にも当たらなく、比較的穏やかな中での釣りとなった。

しかし、おいらはあまりの不調に、明け方、嵐氏に電話してみると彼が確かに言ったねぇ。「全然だめだ。チビカジカにハゴトコじゃぁどうしょうもねぇ。昆布取りの舟が海を掻き回して、魚に落ち着いてエサを取らせるまでに一時間もかかってしまった。」彼はいつもこうなんだ。どれだけ釣っていても「なんも釣れねぇ。」とぼやくだけなのだ。どれだけ釣

れば満足するんじゃぁ。だんまりを決め込んで、後で仲間があんぐりと口を開けて魂消(たまげ)る姿に喜びを見出しているのかぁ。まぁ、こういうたぐいの族(やから)は、釣り人に多いのだが・・・。おいらのように己(おのれ)の自慢話や手柄話に終始するのも褒められたものではないのだが・・・。

横澗の湾洞に入った吉井氏は、好ポイントがすでに他会のメンバーで占められていた。押しの強さで鳴らしたかつての勢いも影をひそめ、どん尻に陣取らざるを得ず、ちびちびとカジカと遊んでいたんだ。得意とする横澗の出岬にも潮の高さを見て恐れをなして、エンドモ岬の右に出てアブラコを抜くのがやっとだった。それでも入賞者の写真を撮る時に言ったねぇ。「こんな魚で準優勝かよ。」

三位の田中氏は菊水の舟揚場でカジカを取っていた。しかし、潮が引いても前の岩盤には出ず、その舟揚場周辺からの大遠投で大アブラコを抜いたのだ。彼曰く。「長靴でも可能な安全な釣りに徹しているから・・・。」おめえよ、母ちゃん泣かせないための紳士気取りかぁ。それじゃ、紋付き袴で釣りしてよ。それでも言い返したねぇ。「その大アブラコは、ズッコン、ズッコンと竿を揺らしたもんな。」それを言うならバッコン、バッコンでねえのか。しかし、ズッコン、ズッコンという言葉は久し振りだねぇ。永い事、忘れてしまっていた。

着いてすぐに五十嵐の高岩に乗って釣り始めた島川氏は、満潮時間帯をも高岩上に居座り続けて惰眠を繰り返すこと数度。遠くから眺めていた嵐氏は、高岩に打ち上がる怒涛と降り注ぐ波飛沫に、とても心配したそうな。隣にいた秋田谷氏がたまりかねて叩き起こすと、むんずと起きだして釣りはじめ、大アブラコを引き抜いて四位に食い込んでしまった。秋田谷氏は大カジカを仕留めていたのだが嫁さんになるそのアブラコが抜けずに苦労していたのに・・・。島川氏が「お前と戦うのはこのぐらいで丁度いい」と言ったかどうかは定かでない。

五位の片岡氏は、油駒の湾洞に入ったが、暗いうちは〇〇の〇坊主だった。釣果は、明けてから油駒三本岩に続く根元の岩盤に乗ってからの一時間ほどのものである。大アブラコにいたっては締め切り間際に一本バリの遠投で来たものだ。彼はつい言ってしまったねぇ。「この俺の腕前ならば一時間もあれば十分でしょ」

今年は不調の襟裳だった。夕日が丘～日勝大和に四人が下りたが、かろうじて堀内氏が身長賞を取ったカジカ一本のみで、三人が坊主だった。場所によっては回復の兆しが見えないものの、何とか大物の姿も見えだして、まあまあの釣りになったのではなかろうか。次回は、黄金道路での釣りである。こちらの方は好調が伝えられているので、良い釣りをしてきてほしいものだ。あっ、そうそう。三回大会で七月の釣り場について話し合っている途中、皆があまり経験のないところで、どうしてこの範囲を選んだんだということになり、結局、千平～目黒港に変更した。おいらは第一・第二集落や百人浜でのタカノハ釣りを思い描いていたのだけんど・・・。

おっと、言い忘れていた。総合優勝と身長優勝の重複ありは、今回だけのことだから。

「とんとん会」に捧げるセレナーデ

（親しい相手や称賛すべき人物のために演奏される音楽。）

♪ とんとんとんまの天狗さん　とんまでおセンチお人好し
握る竿は大上段　エイ　お魚共を釣り上げる
姓は荻野　名は一利　　（会長に敬意をはらって）
釣りが大好き　僕らの仲間　とんとんとんまの荻野さん

♪ とんとんとんまの天狗さん　強くてハンサム朗らかで
振るう竿は空手打ち　エイ　大物共を釣り上げる
姓は（会員の性を入れて下さい）　名は（会員の名）
釣りが大好き　僕らの仲間　とんとんとんまの（性でも名でも）さん

頓馬天狗